



新年のご挨拶



病院長 新家 眞

あけましておめでとうございます。令和も3年(西暦2021年)となりましたが、令和2年=2020年は、文科省検定の教科書にも残るであろう、全世界の人々にとって忘れられない年となってしまったようです。行く年の前に先ず新年のご挨拶ですので、まず来る年の事から考えてみたいと思います。令和3年は十干十二支で辛丑(かのと・うし年)となります。昔の人は、いろいろ易で未来の事を占った訳ですが、丑はチュウと発音し本来牛とは何の関係もなく、植物の芽が種の中でまだ伸びる事ができない状態をさします。また辛(かのと)は「痛みを伴う幕引き」を意味するそうなので、「痛みを伴う幕引きと殻を破ろうとする生命の息吹即ち希望」という事になるようです。又、この十干十二支の典拠は古代中国の陰陽五行思想あたりとも関連するので、当然中国でも今年(辛丑年)ですので、中国・台湾も同じように2021年を考えている事は間違いない訳です。以上なんとなく辛丑令和3年を迎えるにあたって、参考になりそうな気もしないのではないのですが、如何でしょうか。

さてここで令和2年(2020年)の事を振り返ってみたいと思います。去年は庚子(かのえね)年でしたが、これは新しい事に「チャレンジするのに適した」年と解釈される事は既に去年の新年のご挨拶で申し上げました。結果論ではありますが、又チャレンジをしたのかしなかったのかは別として新しい事にチャレンジするのに適した年であったのは間違いないようです。当初新型コロナウイルス感染症に関しては、分からない事だらけで手探り、且つ防戦一方の診療態勢しかとれませんでした。しかし、その中でも区長を始めとする世田谷区の医療現場への共感、玉川及び世田谷区医師会の地域支援病院である当院への御理解と協力のもと、当初は大いに危惧された院内感染、クラスター発生、地域医療の崩壊をなんとか回避しつつ、7月に第5回目の病院機能評価(一般病院2<3rd G:Ver, 2.0>)を優等な評価のもとに終える事ができたのは、自我自賛かもしれませんが病院としても一瞬の安堵の息をつけた所でありました。思えば2月末の所謂発熱外来(現 新型コロナ検査外来)設置、4月の1東病棟の病院他施設と物理的に隔離された隔離病棟(新型コロナ専用病棟)としての整備と新型コロナ患者の正式な入院受入れ、8月からの院内RT-PCR設置等、それなりの対策は時事刻々整えてきたつもりではありますが、8月の第2波、11月~12月の第3波と次々とする新型コロナのビッグウェーブに、下手なサーファーよろしく翻弄され続けた令和2年でしたが、令和3年への丑年の本来の意味、殻を破ろうとする植物の種の中の芽も、ない訳ではありません。新型コロナ禍が収束してから本格的発動となると思いますが、一般病床を30床増床する許可を取り、そこを救急及び災害時(これは地震のみならず新型コロナのような予期せぬ感染症や、東京オリンピック開催時に危惧されるテロも含みます)への対応病床として、世田谷区地域医療支援病院と災害拠点病院としての責務をより完遂する条件を整える事、及び東京都がん診療拠点病院(従来は同連携病院)の申請を認めてもらう事を令和3年度の当院の新たな課題としております。もちろん少なくとも後一年は続くであろう新型コロナウイルスに対する医療及び始まれば国を挙げての大事業となるであろう新型コロナワクチン接種事業に対しては、病院をあげて対応しなければいけない事は言うまでもありません。スペイン風邪(A型インフルエンザ)の収束には2年かかりましたが、今の医療はソフトもハードも当時とは比べ物にならない位に進歩しています。令和3年が辛丑の意味する通りに、新型コロナ禍の幕引きと、将来への希望の芽吹く年となりますよう、そしてそれが皆様に平等に叶えられますように祈りたいと思います。本年もどうぞよろしくお願い致します。